

完了報告書（平成 23 年度）

提出者 宮武 実知子

提出年月日 2012 年 10 月 12 日

【プロジェクト名】

和文 犠牲者を記念すること—沖縄と済州の事例を中心に

英文 How to memorize the victims – in cases of Okinawa and Jeju--

【メンバー構成】

研究代表者 宮武実知子

幹事

メンバー 高誠晩、山本めゆ

【ねらいと目的】（600 字程度）

死者を弔うということは、本来、親族や共同体といった「親密圏」によって担われてきたが、近代以降、戦争や国内紛争や大規模災害によって大量の死者を出した場合、死者は社会や国家全体といった「公共圏」で追悼され、公的な記憶としての意味づけが行われてきた。さらに現代では、公共圏における追悼には、死者に名誉をもたらすとして歓迎されることもある一方で、死者が収奪されているとして抵抗を示されることもあるように、その解釈は一義的ではない。20 世紀に生じた大量死の死者の行方を、沖縄・済州島・南アフリカという三つの社会の経験を事例にして考えることで、死者を弔うという行為に刻まれた親密性と公共性のせめぎあいを浮き彫りにしようと考えた。今回、直接のフィールド調査の対象とした沖縄は、約 20 万人の死者を出した地上戦から 66 年が経過しており、今なお戦争の痕跡を残しつつも経験者や関係者は減少しつつある。犠牲者の追悼をめぐる「親密圏と公共圏の再編成」のまさに途上にある様相を調査するのに最適な事例であると言える。この変化を観察すると同時に、今しか聞けない親密圏からの声を記録することを目的とした。また、沖縄（宮武）と韓国済州島（高）と南アフリカ（山本）という異なるフィールドを持つ者たちが調査行動をなるべく共にして活発な意見交換を交わすことで、「犠牲者を記念すること」の親密圏と公共圏の双方における意味について考察を深めることを目的としていた。

【活動の記録】

高と山本は、①6 月 23 日（慰霊の日）前後、②8 月 15 日（終戦記念日）前後、③10 月 23 日（沖縄県護国神社の秋季例大祭）前後の数日間、ともに沖縄入りして現地在住の宮武とともにフィールド調査をおこなった。ほとんどの行動を共にしたが、同じ日に違う立場や場所を調査することもあった。主な活動は、

- ① 傷痍軍人会銅像除幕式（2011 年 6 月 22 日、宮武・高、沖縄県護国神社、解散を目前にした傷痍軍人会の活動について参与観察するため）、
- ② 沖縄県遺族連合会主催の写真展（2011 年 6 月 22 日、宮武・高・山本、沖縄県立博物館、博物館への展示という形でおこなわれる遺族会 50 年の歴史を観察しつつ、会員への聞き取りをおこなうため）、

- ③ 「沖縄全戦没者追悼式」参列・遺族連合会主催「平和大行進」(2011年6月23日、高・山本、平和祈念公園、沖縄の公的な記念日の様子を参与観察するため)、
 - ④ 沖縄県護国神社「慰霊の日」祭典(2011年6月23日、宮武、沖縄県護国神社、沖縄の公的な記念日の様子を参与観察するため)
 - ⑤ 沖縄一般家庭(加治家)での旧盆行事ウークイ(送り火)(2011年8月14日、宮武・山本、那覇・加治家、親密圏における慰霊の行事を参与観察するため)
 - ⑥ 沖縄県護国神社「終戦記念日みたま祭」(2011年8月15日、宮武・高・山本、沖縄県護国神社、沖縄の護国神社における「終戦記念日」の行事に参列し、参拝者の様子を観察するため)、
 - ⑦ 「靖国神社合祀取消及び損害賠償請求控訴審」判決傍聴・「原告側集会」参加・「被告側報告集会」参加(2011年9月6日、宮武・高、福岡高等裁判所那覇支部および波上神社神宮会館、メディアで報じられない法廷での実際を見聞し、戦後補償と慰霊に対する両陣営の考えを聞き取るため)、
 - ⑧ 沖縄県護国神社「秋季例大祭」参与観察(2011年10月23日、宮武・高・山本、沖縄県護国神社、観察するため)
 - ⑨ 靖国訴訟記録映画『靖国の檻』上映会及び集会(2011年11月19日、宮武、南風原文化センター、靖国神社反対派の歴史観について参与観察するため)、
- また、聞き取り調査の活動記録は以下の通り。
- ① 在沖縄奄美戦友会会長・里中一喜氏、沖縄戦史刊行会代表・瀬名波栄氏(2011年6月24日、宮武・高・山本、月刊沖縄社、「沖縄戦」以外の「戦争経験」をした元兵士の方々の思いを聞き取るため)、
 - ② 沖縄県傷痍軍人会会員・勝田直志氏(2011年8月16日、宮武・高・山本、勝田氏自宅、沖縄戦を経験した元兵士の記憶と思いを聞き取るため)、
 - ③ 同会理事・仲本潤宏氏(2011年8月16日、宮武・高・山本、沖縄県傷痍軍人会会議室、沖縄戦経験と戦後の活動について聞き取るため)、
 - ④ 沖縄県遺族連合会会長・仲宗根義尚氏(2011年8月17日および10月25日、宮武・高・山本、沖縄県遺族連合会「くろしお会館」、沖縄戦経験および戦後の遺族会活動について聞き取るため)、
 - ⑤ 同会副会長・島袋秀子氏、同会理事・照屋苗子氏(2011年8月17日、宮武・高・山本、沖縄県遺族連合会「くろしお会館」、女性たちの沖縄戦経験と戦後補償への思いについて聞き取るため)、
 - ⑥ 同会名誉会長・座喜味和則氏(2011年10月24日、宮武・高・山本、沖縄県遺族連合会「くろしお会館」、沖縄戦後の遺族援護活動に携わった経験と思いを聞き取るため)、
 - ⑦ 沖縄県護国神社禰宜・加治順人氏(2011年10月26日、宮武・高・山本、沖縄県護国神社、戦後に護国神社を再建した加治家の活動を聞き取り、神社の特性や今後への展望を聞き取るため)、
 - ⑧ 鱸文子氏(2012年2月19日、宮武、福井県坂井市、沖縄戦で弟を亡くした遺族の思いを聞くため)
- その他、護国神社参拝者や遺族会・傷痍軍人会の事務局職員、靖国側関係者などから聞き取りを行った。

【成果の概要】

沖縄にフィールドを限定して活発な調査をすることで、以下のことが明らかになった。

- ① 戦争被害の多様性： 一般には南部の焦土と化した地域での民間人の戦争体験がよく知られるが、居住地や家庭や年齢によって沖縄の戦争経験は実に多様である。
- ② 日本兵の戦争経験： 民間人の戦争経験はよく知られるが、沖縄以外から来た日本兵や、日本兵として従軍した沖縄人（特に一兵卒）の経験は注目されてこなかった。
- ③ 語り部の偏り： 現在、一般的な「戦争体験談」が広く流通し、それに似たものを語る傾向が強くあるらしい。聞き手の側の期待としても、語り手側のサービス精神としても、そうした典型的な話を繰り返して補強していく現象が確認された。
- ④ 援護法や年金への態度： 遺族や傷痍軍人それぞれによって援護法や年金の捉え方は異なる。また、援護法適用のために奔走した側の言葉はほとんど知られていない。

沖縄の戦争犠牲者の追悼に関しては、現在、まさに「親密圏」と「公共圏」の再編成の途上にあると言える。実際の記憶をもつ世代の減少によって、「戦争の記憶」の画一化が起きている。公共圏での「沖縄戦の記憶」なるものは、さまざまな多様性を削ぎ落とし、単純化されて記録される。資料館や式典で繰り返し「忘れてはならない」ものとして語られる「沖縄戦」が、こうした画一化された神話の再生産となることを危惧する。

本研究では、経験者による今しか聞けない話を数多く聞くことができた。遺族会や傷痍軍人会などのような、似た経験や背景をもつ人々の親密圏において共有されてきた多様な「記憶」を公共圏でも確保していく方法の整備が急務である。

従来の沖縄研究や報道ではあまり取材の入らない場を調査できたのが、今回の大きな成果だと自負している。また、居住地（沖縄・京都）、国籍（日本・韓国）、フィールド（沖縄・韓国済州・南アフリカ）を異にするメンバー3人が、なるべく直接会って調査行動を共にし、頻繁にメール等で意見交換できたことで、互いに議論を深めることができた。得られた知見や新たな課題については、今後それぞれが論文や書籍の形にする予定である。

【通信欄】

(研究代表者記入)

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input checked="" type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	700 (千円)	実績額 700,000 円

【写真】



2011年6月22日、沖縄県傷痍軍人会の「夫婦像」除幕式。全国一会員数の多かった沖縄県の傷痍軍人会も、会員数減少により2013年に解散となる。最後に形になるものを残したい、と護国神社境内に記念像が建立され、台座の中に名簿や会誌が収められた。



2011年10月23日、沖縄県護国神社の秋季例大祭。かつては多くの遺族が参列して境内を埋め尽くしていたというが、現在ではずいぶんと規模が縮小されている。